

# 情報リテラシ教育の一手法

## A Method of Information Literacy Education

魚田 勝臣†  
Katsuomi UOTA †

† 専修大学 名誉教授  
† Professor Emeritus from Senshu University

### 要旨:

小論では、われわれが上梓した教科書「グループワークによる情報リテラシ：情報の収集・分析から、論理的思考、課題解決、情報の表現まで」の内容と特徴について述べる。

### Abstract:

In this paper, we argue about contents and the distinguishing characteristics of the textbook “Information Literacy Attained Through Group Works”.

## 1. はじめに

人間は情報に基づいて行動し行動することを通じて新たな情報を作り出している。この構図は、一人ひとりの個人についてもグループや組織についても当てはまる。そして、人間が社会生活を営むようになってから行われており、これからも続くと考えられている。この論文シリーズで論述する手法とそれに基づいた書籍[1]は、このうちの個人に関する情報の活用能力を対象にしている。つまり人間が生きていく上で必須の能力を系統的に学ぶ手法と言える。

## 2. 情報リテラシとは (第1章)

「情報リテラシとは」は5つの節で構成している。

- 1.1 情報活動と情報リテラシ
- 1.2 情報リテラシの重要性と PDCA サイクル
- 1.3 本書の構成と使い方
- 1.4 情報倫理
- 1.5 著作権

はじめの部分で人びとと情報や情報システムとのかかわりとそれらに関する能力としての情報リテラシの意味するところ、ついでそれらを学ぶことの重要性と活動の基本である PDCA サイクル、使い方と対応させた本書の構成、そして手法を学ぶために必要な範囲での倫理と著作権について、それぞれ学ぶ構成にしている。

### 2.1 情報活動と情報リテラシ

人間は情報によって行動し、行動することを通じて新しい情報を作りだしている[2]。本書では、情報リテラシをこうした個人の行動の基礎となる情報に関するリテラシ (活用能力) を学ぶものと考えている。本手法では、はじめに情報・情報リテラシは何かをしっかりと認識させる。巷間ともすれば間違った見方が散見されるからである。そのため、コンピュータやアプリケーションソフトの操作について学ぶ「コンピュータリテラシ」とは峻別している。コンピュータリテラシについては、著者らによる「コンピュータリテラシ 情報処理入門」がある[3]。一方、組織としてのリテラシにあたる情報システムについては、著者らによる「コンピュータ概論 情

報システム入門」がある [4]。

本書では情報活動の項目を箇条書きにして示している。

- a. 言葉などにより情報を表現する能力:手紙やレポート、小論文など文章を作成する能力
- b. コミュニケーション能力
- c. 適切な情報を収集する能力
- d. 論理的ないし批判的に考えて自分なりにまとめる能力
- e. 分析し解決する能力
- f. 感情を離れて、他人と議論する能力

### 2.2 情報リテラシの重要性と PDCA サイクル

人間は生存のために活動し、活動を通じて得られた情報に基づいて、次の活動を計画して実行に移していると考える。これらは、PDCA (Plan-Do-Check-Act) あるいは PDS (Plan-Do-See) として知られている。このことを図1で示している[1,p.5 図 1.1]。そしてこれらすべての活動において、記録して進めることが大切と説いている。

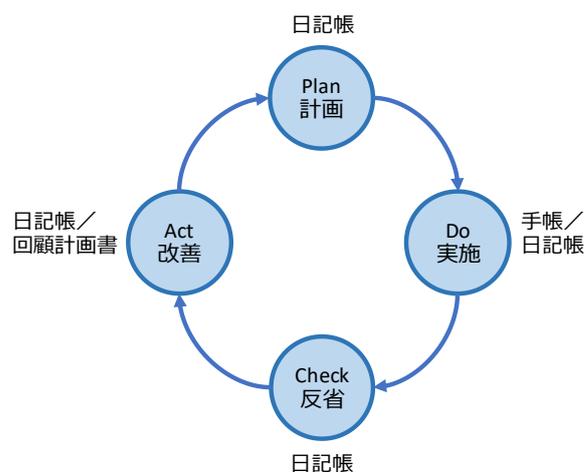


図1 個人の情報活動における PDCA サイクル

計画しそれに基づいて行動するのと場当たりに行動するのでは、効率・効果とも大きな差が出てくる。また、計画がなされていると心の準備ができるから、ストレスがたま

ることも少ないと思われる。ともすれば無計画に学生時代を送りがちであるが、計画を立て反省して次の行動を起こすことを身につけておけば、社会に出たときに困らない。学生時代に自らのライフスタイルを確立しておくのがよいことを強調している。

### 2.3 本書の構成と使い方

本書では、情報リテラシの活動と本手法の展開を図2[1,p.6 図1.2に追記]で示している。左端には2.1節で述べた情報リテラシの活動項目、右はそれを受けた本手法の展開、そして矢印は相互の対応を、それぞれ表している。ディベートについては、すべての活動を関連させ総括して学ぶことを示している。また、右端は全体を貫く物語が「ごみの減量化」であることを強調して示している。

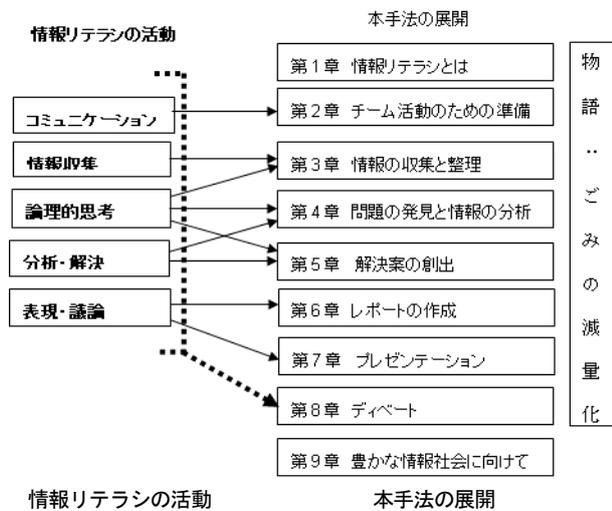


図2 情報リテラシの活動と本手法の展開

内容についてはそれぞれの論文で示しているの、第1章では第2章以下本書全体で行う学習内容を概観している[1]。本書は、全体を把握した上で細部に進む俯瞰的な見方で学習を進める特徴を持たせているのでその一環でもある。小論でもそのため本項と物語について、強調する。

#### 1) チーム活動のための準備 (第2章)

人は、良いチームを作り協調して活動すると、個人では考えつかなかったアイデアを生み、選択や決定に反映できるといった相乗効果(シナジー効果)が生まれると言われている。特に企業や役所などの活動で生じる課題解決のための意思決定作業などでは、所与の情報量が多く、一人で処理できる範囲を超えることや、多面的な検討が必要になることから、チーム活動の方が個人作業よりも優れると考えられる。第2章では、成果を生むために必要不可欠なチーム作りの基礎を学び以下の各論に進む。

#### 2) 情報の収集と整理 (第3章)

この章では、問題を解決するために適切な情報を収集することと収集した情報を整理する方法を学ぶ。はじめに、情報の収集と整理の基本を理解し、情報源と情報の収集手段について学ぶ。この作業は調査リストを作りながら進める。具体的な事例で理解を深め、最終的には文献リストにまとめて、次章へ進む。

#### 3) 問題の発見と情報の分析 (第4章)

問題とはあるべき姿と現実のギャップと考える。はじめに、第3章「情報の収集と整理」で集めた情報に基づいて、問題が何であるかを明確にする。その上で、収集した情報を整理・加工し、問題に有効で本質的な情報を抽出する。また、それら情報間の原因と結果の相関関係を解明して、ロジックツリーなどの形にまとめる。そして、解決案の創出のための制約条件と解決への筋道を立てて、次章に進む。

#### 4) 解決案の創出 (第5章)

この章では作業に先立って二つの準備をする。すなわち、解決案をしばる制約条件とより良い解決案を選択するための評価尺度を明白にすることである。

本論での解決案の創出は、第1段階でブレインストーミング法により、自由に発想する雰囲気の下で多くのアイデアを生み出し、第2段階でKJ法を用いてアイデアを整理して解決案を導く方法を採用している。複数の解決案を導くようにしているので、その中から、予め決めておいた評価尺度に基づいて最良のものを選択する。そして、情報発信：レポートの作成、プレゼンテーションおよびディベートの段階に進む構成にしている。

#### 5) レポートの作成 (第6章)

ここでは、第5章までの成果物をレポートにまとめる方法を学ぶ。はじめに、レポートの意義と役割を認識した上で、基本構成と章立てを学ぶ。ついで、レポート作成の具体的な方法について、作成の全体手順、利用する文献の扱いと表示、レポートに必要な表現法と注意事項、そして理解しやすい表現のコツを知る。最後に、チーム活動の中で、分担してレポートを作成する場合の留意点について学ぶ。

#### 6) プレゼンテーション (第7章)

ここでは、成果物を他人に伝達する方法の一つであるプレゼンテーションについて学ぶ。はじめに、プレゼンテーションの定義とその重要性について学ぶ。ついで、プレゼンテーションの準備の仕方と良いプレゼンテーションを行うための基本的な技術について学習する。特に、プレゼンテーションで重要な技法である箇条書きによる表現方法やビジュアルな表現方法および口頭発表の技術について学ぶ。

#### 7) ディベート (第8章)

ディベートは、情報の収集や分析、発信、プレゼンテーションなど第7章までに学んできたことのすべてを駆使して行う。その意味で、ディベートは情報リテラシの最終教材としてふさわしいと考えている。本項では、ディベートの定義とその効用、ディベートの遂行方法と準備の仕方の順序で学ぶ。特に、立論の準備と構成について詳しく学ぶ。立論以外の反対尋問や最終弁論については、これを応用して行うことにしている。

#### 8) 豊かな情報社会に向けて (第9章)

ここでは、終章として三つの話題、情報社会のリスクとプライバシーの保護、メディアリテラシおよび重要課題の解決と情報リテラシについて学ぶ。最初に、社会の進展に伴って増え続けるリスク、そのリスクへの向き合い方、そのなかでのプライバシーの確保について考える。それらと関連して、税や福祉の面での公平公正な社会を実現すると言われている番号法(通称：マイナンバー法)について、目的や問題点などを学ぶ。そして、メディアに関してその本質を考え、盲信することなく複数の情報源から情報を得て自ら考えることの重要性を認識する。最後に地球的重要課題を、本書の問題解決手法の手順に従って検討することで、学習内容を反芻し、

豊かな情報社会を実現するために、どのように行動すべきか考える。

本手法は、課題解決の道筋全体を貫く物語であるところのごみの減量化を示すことによって理解を関連づけ容易にすることを特徴としている。またこれによって本手法の特徴である俯瞰的な見方を浮き彫りに出来ると思うので、以下に少し詳しく述べる。

#### 1) 第2章チーム活動のための準備

本手法では、学習活動の主要部分をグループワークとして行うのを特徴としている。そのため演習の早い段階でチーム作りを行う。それを効果的にするため、笑顔とハイタッチによる自己紹介でアイスブレイク(氷のように冷たい雰囲気を壊す)を行って和やかにする。

#### 2) 情報の収集と整理(第3章)

実際の物語は、図書館やネットワークにおける「ごみ問題とは何か」、「生活系ごみ」と「事業系ごみ」の区分やごみ処理のプロセスなど箇々の項目の調査から始まる。ごみ減量のための「3R」(Reduce: 発生抑制, Reuse: 再使用, Recycle: 再生利用)の考え方を知り、生活系ごみが約65%を占めると分かって、調査が進むとともに意欲の高まりを実感する内容にしてある。

#### 3) 問題の発見と情報の分析(第4章)

第3章の結果に基づいて、ごみを減らすための3R,その内のReduceに注目することにしていく。それには、ごみの有料化、レジ袋の有料化とごみの減量化があり、その内のごみの有料化を阻む原因として、不法投棄、税の二重負担など4つの項目があることが分かる。そして、不法投棄の課題について、集団回収やマンションでの回収をしている実情から、誰が捨てたかわからないので安易に捨てることと誰も見ていない山林等に安易に捨てる、の2項目をあげる。

#### 4) 解決案の創出(第5章)

ここでは「ごみの不法投棄」について、その解決案を創出する。その方式は二つの段階からなる。

第1段階として、不法投棄の問題に対して、メンバが発想したアイデアを付箋に書いて貼り付ける模様を示す。

第2段階として、不法投棄の問題で発想したアイデアを対象に、グループ化して、適切な見出しを付ける。そして、これらをより大きなグループに束ねて見出しを付ける。こうしてグループ化したものを再び展開し、グループの関連付けを行って解決案としてまとめる。

以上に述べたとおり、ごみの減量化という物語を、1)で構築したチームによるグループワークによって、2)の情報の収集と整理から4)の解決案の創出の過程を実行していく過程としていることが理解されよう。この物語を通じて、系統的に問題を解決する醍醐味が実感できると思われる。これまで、勘と独断で解決してきた課題が、系統的な方法で解決できたことに喜びを感じるように仕組んである。

以上の解決までの物語に区切りを付け、表現と議論の段階に進む。演習ではディベートによって締めくくる。

## 2.4 情報倫理

情報倫理は情報社会における倫理であって、とくにコンピュータやネットワークなど情報システムを使って情報に関わる活動を行う際の倫理といえる。倫理の根幹は時代が変わ

っても大きく変化することがなく、情報時代になって新しい項目が追加され、一部の項目が強調されたりする。

社会人としての情報倫理を考えるために、情報処理の専門家や組織されている情報処理学会で定めている社会人としての行動規範:

- a. 他者の生命, 安全, 財産を侵害しない,
- b. 他者の人格とプライバシーを尊重
- c. 他者の知的財産権と知的成果を尊重
- d. 情報システムや通信ネットワークの運用規則を遵守
- e. 社会における文化の多様性に配慮.

を示している[5].

## 2.5 著作権

初年度の学生が最初に行う情報活動の一つに資料や図書などの複製と引用がある。「情報リテラシとは」(第1章)ではこのことに焦点を合わせて著作権について学習する。

学生生活では、本や雑誌の一部をコピーして日記に貼り付けたり、レポートや論文に他人の文章を引用したりすることは普段から行われている。また、教室では、教員が参考資料として、教員本人の著作物でない資料のコピーを配布することもある。記事や論文等は著作物であるものの、紙媒体によるこうした私的な使用や教育機関での利用は、一定の約束事を守れば問題はない。ところが、ネット環境下において、ブログ、メール、論文などの中で同様な行為を行うと問題が生じることがある。それは、ネット環境が世界につながっているという特性によるものである。「情報リテラシとは」(第1章)の著作権の項目ではこのことを強調し、著作物についての他人の権利を侵害し、逆に自分の権利を他人に侵害されないためのルールとマナーを学ぶようにしている。

## 3. まとめ

本書は情報リテラシを個人の行動の基礎となる情報に関する活用能力と捉えて、情報の収集・分析から、論理的思考、課題解決、情報の表現までの学習手法をごみ問題の解決という物語をもって展開した。小論ではその緒論に当たる第1章の内容と特徴について、全体の構成と物語性に注力して論述した。他の章とともに大方のご批判を賜ることを期待する。

### 参考文献

- [1] 魚田勝臣編著, 渥美幸雄, 植竹朋文, 大曾根匡, 関根純, 永田奈央美, 森本祥一著, グループワークによる情報リテラシ〜情報の収集・分析から、論理的思考, 課題解決, 情報の表現まで, 共立出版, 2015.
- [2] 情報システム学会編, 新情報システム学序説一人間中心の情報システムを目指して一, 情報システム学会, 2014.
- [3] 大曾根匡編著, コンピュータリテラシ 情報処理入門第3版, 共立出版, 2015.
- [4] 魚田勝臣編著, 渥美幸雄, 植竹朋文, 大曾根匡, 森本祥一, 綿貫理明著, コンピュータ概論 情報システム入門第6版, 共立出版, 2014.
- [5] 情報処理学会, 社会人としての行動規範. 最終検索日: 2017/01/16.

